



発行にあたって

新年、あけましておめでとうございます。新しい年が皆様にとってさらなる発展と成功が訪れることを心よりお祈り申し上げます。

今年も北専各連は、各会員校と連携してより良い教育環境を構築し、社会に貢献できる人材を輩出するための努力を重ねてまいります。

広報北専各連メール便では、本年も旬な話題を皆様にお届けしてまいります。

引続きご高覧くださいますようお願いいたします。

理事長 吉田 松雄

トピックス

■ 文部科学大臣認定「職業実践専門課程」に係る研修会（令和5年度第2回）



職業実践専門課程の認定要件である「教員に対する研修・研究機会の確保」のため毎年実施している研修会で、教育に役立つテーマを設定して開催しています。

第2回は令和5年12月21日(木)に札幌ガーデンパレスにおいて、172名の方の参加の下、認定NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム理事長の新保 元康 氏をお招きし、「未来の北海道を創る～令和の働き方・学び方を考える」と題して講演をいただきました。

新保様からまず、北海道には魅力が多くあることについて事例を紹介していただき、多くの方が気づいておらず、北海道の魅力を生かして北海道を発展させていくことが大切であるとお話がありました。次に、学校教育のDXに係わり、現在、義務教育ではGIGAスクール構想が進められ大きな転換期になっており、今後、質の高い教育の実現と人口減少化での教育現場の人材確保のため長時間勤務の解消などを進める必要があり、そのためにICTを活用した効率化を進めて行くことが重要であるとの話をいただきました。



■ 北海道社会貢献賞

前旭川大学情報ビジネス専門学校校長の開田仁司氏（現北都保健福祉専門学校本部長）が、令和5年度北海道社会貢献賞（私学教育功績者）を受賞され、令和5年10月30日(月)に表彰式が行われました。

これまでのご功績に敬意を表しますとともに、今後のご尽力をお願い申し上げます。



■ 国等に対する要望活動

専修学校等が職業教育機能を高め、多様な社会的要請に応えていくため、必要な財政措置などを要望しました。特に高等課程に対する特別地方交付税措置を要望しました。

(1) 文部科学省に対する要請

11月27日(月)に文部科学省を訪問して、青山副大臣(右写真)、望月総合教育政策局長に要望しました。

(2) 自民党道選出国會議員に対する要請

11月27日(月)に東京都において「要望懇談会」を開催して、自民党道選出国會議員等に出席いただき要望をしました。



■ 札幌市に対する要望活動

令和5年10月11日(水)に「自由民主党札幌支部連合会政策要望懇談会」が開催され、札幌市教育委員会から北専各連札幌支部が受託している「進路探究学習オリエンテーリング事業」、「キャリアプランニング講座」について、より多くの中学生が受講できるよう事業内容と財源の拡充を要望しました。



■ 北海道議会意見書の採択

令和5年度第4回北海道定例議会において「私立専修学校等における専門的職業人材の育成機能の強化等を求める意見書」が採択され、衆参両議長、内閣総理大臣ほか関係大臣に発出されました。

■ 第2回理事会が開催されました

令和5年11月22日に第2回理事会が開催され、主に令和6年度の広報事業計画について審議を行いました。

2024 専門学校等進路相談会について、次の3会場で開催することが承認されました。

令和6年3月18日(月) 北見市 ホテル黒部

令和6年3月19日(火) 釧路市 観光国際交流センター

令和6年5月10日(金) 札幌市 パークホテル

2025 専修学校等概要等の発行について、次のとおり発行することが承認されました。

(1) 2025 専修学校等概要：令和6年4月に3,000部を発行

(2) 2025 進学ガイド・仕事ガイド：令和6年8月に13,000部を発行

》》 広報事業

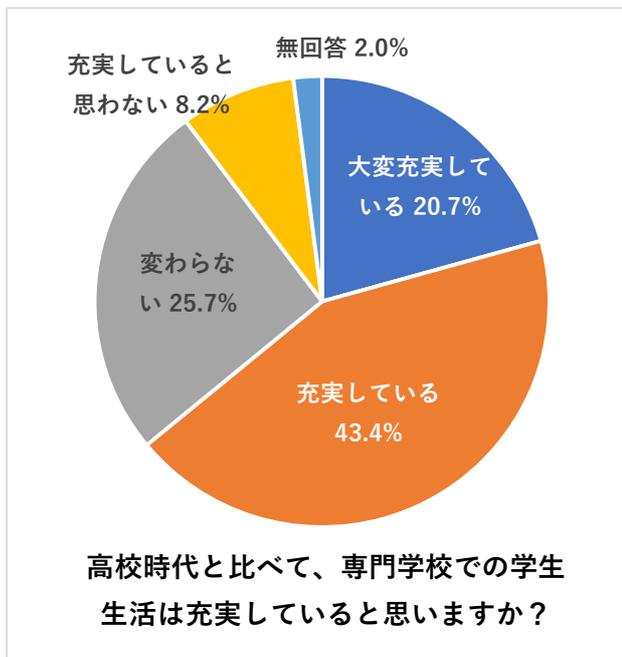
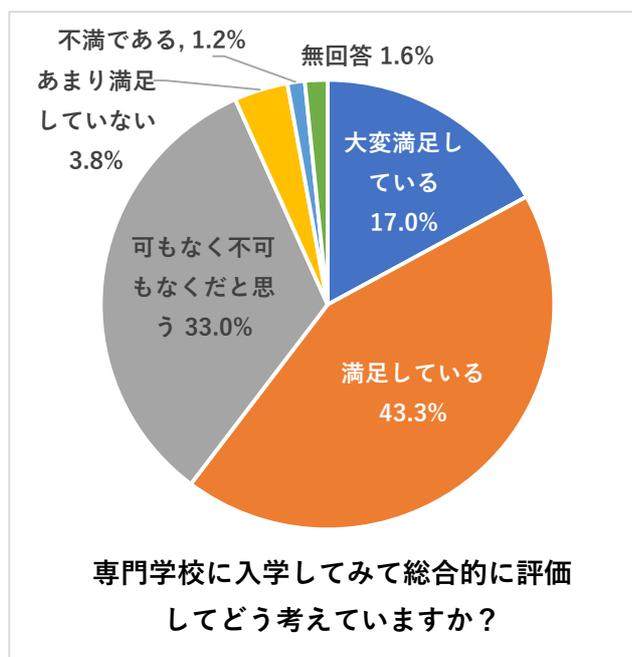
■ 令和5年度専門学校在学生の意識調査

北専各連では、専門学校がどんな経緯で入学し、現在の自分をどのように認識しているか、また、学生生活等について、毎年意識調査を行っています。本年度も4月～6月に専門学校在学生の意識調査を行いました。その一部をご紹介します。

なお、全てのアンケート項目の集計結果は、北専各連のHPに掲載しています。

<https://hsu.ac/info/info-kaiinko/202310113581/>

※対象：令和4年に専門学校に入学し、令和5年4月に2年生なった学生1,690名



》》 支部だより 支部の活動やイベントなどを紹介するコーナーです。

※事務局に支部や会員校の話題や情報をお寄せください。

☆札幌支部☆

[スポーツ事業]

フットサル大会を行いました！！

11月29日(水)30日(木)の二日間、北ガスアリーナにて6校8チームが集い、「フットサル大会」が開催されました。参加校、審判員、運営委員等の皆さまのご協力をいただき、大きなケガもなく無事終了しました。

結果は下記の通りです。

優勝	札幌スポーツ&メディカル専門学校
準優勝	札幌医学技術福祉歯科専門学校
第3位	北海道スポーツ専門学校Aチーム
交流戦優勝	大原法律公務員専門学校



PK戦も見られ大いに盛り上がりを見せました。

若い選手たちが楽しそうに汗をかいている姿はまぶしく、また、自身でゴミを持ち帰ったり、会場整備を行うなど、自立した精神が垣間見られ、大変胸熱な大会でした。

☆特集 令和5年度教員能力認定研修会 レポートの講評と優秀レポート

令和5年7月に開催した「教員能力認定研修会」の研修科目のうち「教育概論」と「教育心理学」はレポート審査に合格することが単位認定の条件となっています。この科目を受講した方には、出題テーマについて800字レポートを手書きで作成して提出いただくもので、「教育概論」29名、「教育心理学」17名から提出いただきました。審査の結果者全員が合格となりました。

審査委員（担当講師）の講評と、教員能力認定委員会で優秀レポートに選出されました6編をご紹介します。

■「教育概論」 審査委員、担当講師 井上 大樹（札幌学院大学准教授）

<レポートのテーマ>

社会的自立に関わる今の若者の困難の実態を説明し、これからの社会的自立の条件および専門学校で重点すべき教育実践について自分の見解を述べる。

◎講評

まずは日常業務が膨大な中で時間を割いていただいた教員の皆様、授業や実習、就職活動の合間を縫って参加いただいた学生の皆様、全ての受講者に本科目受講に丸1日かけていただいた熱意に敬意を表する。その上で本稿では終始、辛口であること、ご容赦いただきたい。

体裁面であるが、段落分け及び字の丁寧さについては教員、学生関係なく不十分な答案が前年度より多く見られたのは残念である。誤字・脱字はこれらの答案から出てくる傾向が顕著であった。一方でおおむね60代の受講者については、これまでの現場経験に思いをはせ熱弁をふるう傾向が共通してみられ、字の丁寧さをもってより説得力を増し講師として評価の公平性を保つのに苦労したほどであった。専門教育では専門職として、社会人としての即応性を鍛えるため、このような体裁に対し徹底した指導をすることが高等教育に対する「強み」であるはずである。

一方、「専門学校で重点にすべき教育実践について」、例年より十分な分量を割いて答案を作成している方が大半であった点は専門教育の「現場主義」精神のあらわれとして高く評価したい。ただ、残念であったのはご自身が所属している学校の教育課程の特性に関わって「具体的な」実践内容に踏み込んだ答案が例年よりむしろ少なかったことである。今回選集に掲載したのは教員1名、学生1名であるが、自身のこれまでの「現場経験」を踏まえ、専門教育の「強み」を今の若者の課題に「更新」した非常に説得力のある論考であった。受講者の皆様におかれましてはこの2本のレポートの講読でもって、本科目の学習のしめくりとしていただき、各々がもつ「教育的情熱」が次世代の育成に寄与せんことを切に願って締め言葉に代える。

優 秀 レ ポ ー ト

北海道文化服装専門学校 長濱 有希乃（学生）

社会的自立に関わる現在の若者の困難は、自立出来る環境が整えられていないことと、知識と経験が少ないことだ。そこで、ここではこれからの社会的自立の条件及び、専門学校で重点すべき教育実践について論じる。

まず、自立出来る環境が整えられていないことについてだ。かつては集団就職をしていたため、親元を離れた寮で仕事や家事はもちろん、教養を得るために様々な稽古を受け、ある種強制的に自立せざるを得ない環境だった。しかし、現在は、大学や専門学校に通っ

てから個人個人で就職をするため、長い間親元で生活する若者や一人暮らしをしても支援を受けている者が増えている。そこで私は専門学校での教育は実務経験をさせるだけでなく、短期の寮生活や宿泊研修などで、礼儀作法や家事などを学ぶ時間を作るべきだと考える。

次に、知識と経験が少ないことについてだ。現在の専門学校では個人作業をさせるばかりで、グループワークやロールプレイなどの参加型の授業はほとんど取り入れていない。実際問題、私は現在専門学校に1年半通う中で2度しか経験したことがない。これは、社会に出て様々な年代や価値観を持つ人と関わる上で、大きな問題ではないだろうか。私が参加型授業を受けて感じたことは、自分では考えもしないような様々な角度の意見を持つ人がいること、複数人で会話や作業をすると表面上では何も起こっていないように見えても、水面下では衝突が起きていて、事が終わった後に問題に気付くということだ。現在の若者は「思っていると言わない。」「気付いてはいるが誰かが指摘することを待つ。」傾向にあるのではないか。学校側はこのような、人とコミュニケーションを取ることで得た経験を自分の知識にする機会を積極的に学生に与えるべきだ。

以上のことから、知識と経験を積める環境を作る事が専門学校で重点にすべき教育実践だと考える。

北海道美容専門学校 布川 耕吉（教員）

工業化社会から情報化社会へ高度化していく中で、雇用構造が変化し人の手で行われる仕事が減少した。結果、新卒者を一から育てる会社が減り、正規雇用者になれないケースが増えている。フリーターの増加もあり、学校から仕事への移行が個人化、長期化、ヨーヨー型化している。また、学力低下や中退者の増加は、高等教育、中等教育の漂流を生みだし、若者自身が漂流している困難な現況である。こうした状況下で、社会的自立の3要素「生」「政」「性」を満たすことは難しい。自立の条件として、経済面や雇用のミスマッチ、不安、孤立感等を解消することが求められる。そのためには、若者だけではなく、社会がキャリア教育を体系化し、知識、技術のみならず、コミュニケーション能力を高める教育を行い、就労するための雇われ力、人間力を身につけさせ、メンタルヘルスのケアも行わなければならない。専門学校は、学びと就労の結びつきの強さに特徴がある。職業を通じての広い意味でのキャリア形成に最も適した学校群である。職業人として必要なスキルを身につけさせ、社会人として自立させることが使命であるが、現在、学生の学力、理解力、モチベーションの格差が大きくなっており、現場の教員は日々葛藤している。画一的な講義、実習の進め方ではなく、参加型授業をさらに進展させる必要がある。そのために学生同士の聞きあいによる学びあい（実習等の振り返り）、さらに接客も含めたロールプレイングや上級生、卒業生も交えた語りあう場を今以上に作らなければならない。学生を多角的な視点で情報共有し、そのまるごとをつかむために教員全体の協力が求められる。専門分野以外でも幅広い選択肢の情報提供を行い、学生の将来設計に役立てることも考えるべきである。若者の社会的自立のためにも学習のみならず、すべてにわたり個別化に対応するサポートの提供が必要とされる時代であるが、学校として対応実践していきたい。

■「教育心理学」 審査委員、担当講師 北守 昭（EWS感性科学研究所代表）

<レポートのテーマ>

現代社会をよりよく生きるため、今、教育に要請されている2つのこと「実学」と「謙虚学」について、人の成長（能力の可能性）という視点から、自らの関心分野に限って、記述して下さい。

◎講評

今、日本人は家庭、学校、および実社会でリアルな生きがいを感じて生活していく上で、様々な困難（生きづらさ）に直面しています。このような困難な時代に在って、『人生、道を踏み外さず、よりよく生きること』はもとより容易ではありません。この時、教育の果たすべき役割は、『よりよく生きる途』を可視化することだろうと思います。

二つあって、一つは、実学（経験値、技術、および関連する資格）であり、もう一つは、謙虚学（それを支えているものを知り、謙虚になること；物理学にして数学、親にして子、教師にして学生等）があります。これらについて、興味・関心ある（今、学んでいる、あるいは担当している）分野の視点から記述していただきました。

審査のポイントは、①内容がテーマに合致しており、主張したいポイントを整理して提示しているか。②内容が読む人に分かり易く、かつ具体的であるか、言い換えれば、自分の経験の中から、自分のことばで表現しているか。③字数、誤字、脱字のチェックがなされているか、文章の段落は適切かなど、研修会の中で説明しましたレポート作成の4つの基本をしっかり踏まえているかの3点を評価基準としました。

総評として、①の点については、テーマから少し逸れたレポートが1点ありましたが、自分自身の言葉で表現していましたので可としました。②の点については、今回はテーマが興味・関心ある（今、学んでいる、あるいは担当している）分野の記述ということから、具体的で分かり易い内容でした。③については、気になる誤字がありました。新化（進化）、知織（知識）、洗礼（洗練）、衣数（衣装）など。日ごろから近く（テーブル）に辞書を！心掛けるとよいでしょう。

最後に、推奨レポートをご覧になっていただければ、幸いです

優 秀 レ ポ ー ト

北海道芸術デザイン専門学校 向中野 杏莉(学生)

現代社会の専門学校教育には、専門的な知識や技術の実学とそれを支える知識の謙虚学を理解することが求められる。本論では実学をグラフィックデザイン、謙虚学を配色とし、なぜ専門学校生が実学と謙虚学を学ぶことによって将来デザイナーとして成長することができるのかについて論ずる。

グラフィックデザインとは、ポスターやパッケージのデザインなど主に広告に使われる平面上のデザインのこと、情報が見やすく整理されていることや目を惹くデザインであることが求められる。そのため、もし配色について理解していなかった場合、デザインがどれだけ美しく整えられていても思った様な印象を与えられないだろう。例えば、明るい印象を持たせたい子ども向けのイベント告知ポスターの制作を依頼されたとする。その際に配色がモノトーンで揃えられていた場合、ポップで元気な印象を持たせたくても、シックで大人っぽい雰囲気になってしまい、狙っているターゲット層には情報を見てすらもらえないだろう。この様なことが続くと仕事がもらえなくなったり、評価がされなかったりすることによる自信の喪失や転職につながりかねない。謙虚学である配色を学ぶことで、商品や企業のブランドイメージを守りつつ効果的なデザインや新しい技法を編み出すことができる。そこから新しい仕事や自信につながり、他の謙虚学を学ぶきっかけになる。これを繰り返すことで、その人にしかできないデザインとして世間にブランディングされていくだろう。そのため、専門学校生のうちからグラフィックデザインだけでなく配色について良く学ぶことで、成長するための能力の可能性を広げる土台作りができる。

以上のことからグラフィックデザイナーの卵である専門学校生は、実学であるグラフィックデザインと謙虚学である配色についてバランスよく学ぶことで将来、自身をブランディングできるほど成長すると結論づけられる。

北海道文化服装専門学校 高橋 弥生 (学生)

実学と謙虚学は、人の能力の可能性の成長において大切な要素である。実学は、経験や現場での実践を通じてスキルを磨く学び方であり、服飾やアパレル業界においても、実践的な経験が重視される。実際の現場での経験や失敗は、様々な新しいアイデアを生み出すこともある。実際に製品を作ったり、販売したりすることが必要である。実際に商品を手掛ける中で、多くの問題や課題と向き合い、解決する力が身につく。また、服飾学生にとっても、実習やインターンシップを通じ、経験を重ね自分自身がどういう分野や方法で輝けるかを見つけることができ、より実践的なスキルを身につけられる重要な手段であり、今後もとて重要視されていくだろう。

そして謙虚学では自分が未熟であることを認め、謙虚な姿勢で学び続けることを指す。洋服やデザインに興味を持ち、自分の感性を大切にすることが最も重要だと思うが、それだけではなく、専門家や学校の先生、周りの意見を取り入れていくこともとても重要である。アパレル業界では常に新しいトレンドを取り入れていかなければならない。自分の中で思い描いているデザインとトレンドのデザインを両立することができれば一番良い。

服飾学生にとって実践的な経験と自己批判を重視することが、アパレル業界で生き残るためには重要だと思う。今の専門学校での授業内容でも外部からの講師のお話を聞く機会や服飾の専門学校ではコンテストなどの実践的な経験の「実学」と、その都度講師や先生、クラス内で交わす意見や指摘を認め吸収することができる「謙虚学」のどちらも学んでいることができていると思う。これからはその様な機会がもっと増え、より学びやすい授業環境が進んでいってほしい。そしてより高い人材を育成できるよう専門学校側は学びやすい環境を整えていき、学生自身も学ぶ姿勢を高めていってほしいと考える。

北海道医学技術専門学校 原 愛里 (教員)

写真撮影に限れば、より良い写真を撮影するためには腕を磨く必要がある。技術面ではカメラの仕組みについて学び、撮影の仕方について、構図やアングル、ポジションなどを習得すれば、それなりに撮影が可能になる。一方、人々に感銘を与える写真を撮影するためには技術のみでは困難で、カメラの機能を最大限に活かし、情緒ある風景、温かな人々などの深みのある写真を撮影するためにこれらを支える多くのことを理解する必要がある。カメラが機能することには工学は不可欠であるし、自身の感性を育むためには日頃から多くの芸術に触れる事が必要である。また、身近にある物や人々の表情を引き出すためには道徳性、コミュニケーション力などが必要ではないだろうか。海外へ目を向けるとすれば語学も必要になるかもしれない。より良い写真を目指すほど多くのことに支えられているのである。そのことに謙虚でいられる方が人間性の深みとともに写真の深みも増し、人として、写真家として、より成長できると考える。しかし、良い写真を撮影したいという目標を持っていない人にとって、実学は多少役に立つことはあるが、支えているものに対して謙虚になることは少ないと考える。

現代社会をよりよく生きるためには、潜在意識の中から可能性を引き出し、目標を設定することで、能力を発揮するために自ずと実学のみならず謙虚学に対しても意欲が湧き、それらが支えてくれているありがたさに気付くことができるのではないだろうか。そのために教員が、如何にして学生の潜在ニーズを引き出し、脳力*の開発に尽力できるかは重要な事柄である。自身の成長力が優れており成功する人もいるが、指導してくれる師がいて導かれ、能力を引き出してもらう場合も多いと考える。その人の作品や人間性に惹かれて、師が目標となることも多い。これは実学が主である専門学校の教員が十分に肝に銘ずべき事柄であると考えます。

(事務局注) *講義中で使用した表記

吉田学園医療歯科専門学校 川島 清志（教員）

実学について、現代の医療環境は急速に進化しており、医療従事者は実践的な知識とスキルを備えていることが不可欠である。最新の医療技術と情報へのアクセスにおいて、医療従事者は常に最新の治療法、薬物、テクノロジーにアクセスできるようにしなければならない。教育は実践的なスキルと情報へのアクセスを提供する必要がある。訓練とシミュレーションにおいて、実学の一環として重要である。手術や緊急対応などのスキルを磨くための実践的な訓練が提供されるべきである。実務経験において、医療教育は臨床実習や病院での実務経験を重視すべきであり、学生や若い医療従事者に実際の医療ケースでの経験を積ませることは、実践的スキルの獲得に必要である。

謙虚学について、医療従事者が常に学び続け、自己過信を避けるために重要な要素である。エビデンスベースの実践において、謙虚学の一環として、医療従事者は常に最新の研究とエビデンスに基づいた実践を追求する必要がある。治療法や診断方法は進化し続けるため、謙虚に新しい情報を受け入れる姿勢が求められる。コミュニケーションと共感においては、医療従事者は患者様とのコミュニケーション能力を高め、患者様のニーズや希望を理解するために謙虚でなければならない。患者様中心のケアを提供するために、謙虚なアプローチが必要となる。協力とチームワークにおいては、謙虚学は、他の医療従事者との協力とチームワークを重視し、医療は専門家の連携が不可欠であり、謙虚な態度は効果的なチームでの働きにつながる。

現代の医療分野では、実学と謙虚学の両方が必要であり、実学は高度な医療スキルの獲得と実践に必要で、謙虚学は医療従事者が自己向上し、患者様との良好な関係を築くために不可欠である。教育はこれらの要素を組み合わせ、医療従事者が現代社会でより良く生きるために必要な知識と資質を養うことが重要であると考えられる。

発行日/令和6年1月1日

発行人/吉田 松雄 編集人/笠島 史生

住 所/060-0001 札幌市中央区北1条西6丁目 札幌ガーデンパレス内

電 話/011-242-1955